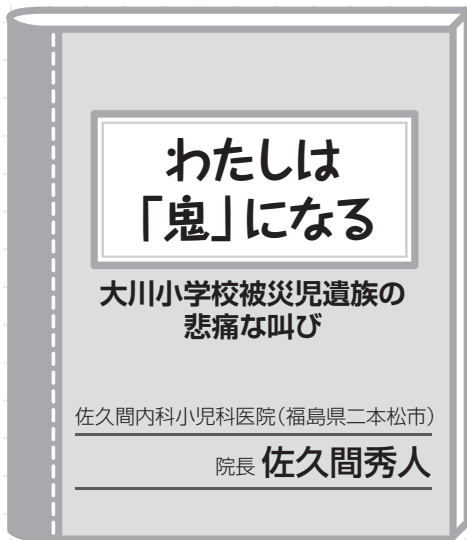


私の

インシデント・ノート 66



宮城県利府町に住む、10年来の親友である高田修は、小児科専門の開業医である。もともとは内科医の私が、まがりなりにも子どもと関わってられるのは、彼の力によるところが大きい。ましてや昨年3.11以来、距離は幾分離れているにしても、同じ被災地の医療者として励まされ、励まし合ってきた。

「石巻に来てみませんか」

突然誘われたのが、今年7月末のことである。石巻市立大川小学校では、東日本大震災による津波のために、74人の児童と10人の教職員が死亡・行方不明となっている。午後2時46分の地震発生後、大津波警報が出されたのが2時52分。3時25分、「津波が来る、高台へ避難を！」と巡回する広報車の呼びかけを聞くまで、生徒たちは校庭で待機させられていた。その時点で避難を始めていれば、救われた命は多かつた筈なもの、避難開始はそれから10分後の3時35分、それも、傾斜の緩やかな裏山へ向かわずに、何故かすでに水が溢れている北上川に向かっての移動だったという。子どもたちの進行方向から、津波が押し寄せてきたことになる。

「何故、50分もの間、生徒たちは校庭に引き止められていたのか」、「何故、逃げやすい裏山へ逃げずに、津波が来る川に向かって歩き出したのか」。遺族たちのなかに、多くの「何故……」が渦巻いている。当日

学校にいた教師のなかでの生存者は、たったひとり。

遺族たちは、学校側や石巻市、石巻市教育委員会（以下教委）に説明を求めたが、未だ納得のいく回答は得られていない（平成24年8月5日現在）。尊い命が失われた現実が、「未曾有の震災だから仕方がない」の一言で、うやむやなまま片づけられようとしている。遺族たちの多くはそう感じている。

高田は、震災後の早い時期から、「ここねっと発達支援センター」を母体として急遽結成された「緊急子どもサポートチーム」と行動を共にし、避難所での子どもの心のケアに当たってきた。その経緯のなかで、大川小学校の現実を知った。ここねっとサポートチームと毎週のように石巻を訪れ、遺族たちの話に耳を傾けた。

遺族たちは初め、混乱のなか呆然としたままだった。高田たちが丁寧に向き合うことで、彼らに「落ちつき」が取り戻されていった。「一生かかっても背負いきれない大きな荷物を、聴いてもらうことで整理して、何とか背負えるまでになった気がしています」。そう語った遺族がいる。

8月5日。遺族の有志が協力し、ここねっとの支援のもと、震災報告会を開催するという。高田の誘いを断る理由はなかった。

報告会前日、ここねっとのメンバーと一緒に、大川小学校を訪れた。校舎の残骸が佇んでいるのみ、周囲の民家は津波に流され、街全体が消失していた。ここに逃げ込めば助かったであろう裏山にも登ってみた。あの日、何があったのか。案内して下さったNさんが淡々と語ってくれた。Nさんは、5年生の息子さんを失っている。

その日の夜、同じくお子さんを亡くされたSさん宅にご遺族たちが集まり、報告会の打ち合わせをした。私も、同席させていただいた。小学3年の一人娘を失った母は、「いつ死のうかと、そればかり考えてきました。でも、このままでは娘に顔向けできないから、

しょうがないから生きています」。唇を震わせていた。「もう、腹を抱えて大笑いすることもないと思う」末っ子を失ったKさんの悲痛な叫びも、私の胸を突き刺した。試練は、翌日に引き継がれた。報告会には、医療・保健福祉関係、教育関係者など、50余人が集まった。

遺族たちを苦しめていたのは、市や教委の対応ばかりではなかった。同じ大川小学校遺族のなかでも、意識の格差が生じているという。「思い出したくない。あの日のことは一日でも早く忘れたいのに……」。NさんやSさん、Kさんたちに同調できない方々がいらっしやることを聞いた。わが子を失った現実を「忘れたい」と思う気持ちも、理解できないわけではない。「そっとしておいてほしい」。それも親であろう。しかし、「忘れられない、忘れたくない、忘れてはいけない」。それもまた、親なのだ。

「あの日、人生最大の神様からのプレゼントである自分の子どもを、迎えに行きませんでした」

再び、Kさんだった。溢れ出る涙を拭おうともせず、何度も言葉に詰まりながら、時にうつむき、時に私たちを見据え、心のなかに淀んだものをすべて吐き尽くすかのように、Kさんは話し続けた。

「2人の子どもと80歳を過ぎた両親、そして息子の友達、目の前にいる『いのち』を守ることに必死でした」、「『3時前だ。学校にいるからあの子は大丈夫』、そう自分に言い聞かせて一晩を過ごしました」、「あの子が、どんな思いで最期を迎えたのか、知ってあげることが母としての、親としての務めだと思います」、「教育委員会の説明会では、何ひとつとして、私たちの質問にまともな答えが返ってきません」、「担任の先生が、子どもたちに何を伝えていたのかさえ、わからない状況です」、「自分の子どもの死を、こんな風に、何も関係のない人に話さなければならない。そんな親がどこにいますか?」、「そっとしておいてほしい。そう思っているかもしれません。死んだ子どもたち」、「それはできない。あなたの死を、無駄にはできない。あなたの生きた証は残さなければならない」……、「そのためなら、わたしは鬼になります!」。

遺族たちの報告が終わった後、司会をされていた、ここねっと代表の佐藤秀明氏が、会場の何人かに発言を求めた。求められるままに、私もマイクを握らせていただいた。

「辛い胸の内を聴かせてくださって有難うございました。よくお話ししてくださいました。でもね、Kさん。鬼にならなくても、いいのではと思います。あなたを含めて、あなたに限らず、そこにおられる皆さん

のおっしゃっていることは正しい。胸を張って、堂々と、あたりまえのことをあたりまえに訴えていけばいいのではと思います」

あの時の自分が何を話したのか、実はよく憶えていない。正直なところ、取り乱していた。

報告会が終わり、会場を出て駐車場まで高田と歩いた。

「わざわざ来てくれて、有難うございました」

「いや、とんでもない。何もできないけど、何か役に立てればと思ったけど、やっぱり何にもできなかった」

「そんなことはないですよ。先生は、居てくれるだけでいいんです」

高田は、優しい男である。

「Kさん、いまはもう、鬼になるしかないのかもしれない。鬼を演じることで、気持ちをなんとか保たせているんでしょうね」

そういう見方も、確かだと思った。1年以上、彼らに寄り添ってきた高田だからいえることだろう。

「佐藤先生たちも僕も、『相手を否定せず、強制せず、丁寧に向き合う』気持ちでやってきました。Kさんにも、同じです。鬼にならないといられないのなら、鬼になったKさんと向き合います。それが、本当の意味での『支援』だと思います」

私は、単純な人間である。ありのままに、思ったことを口にするしか能がない。高田はどうだ。佐藤氏はどうだ。ここねっとのメンバーたちはどうなのだ。自分がどう思うか、ではない。自分を考える前に、「相手」がいる。向き合っている相手の「想い」がある。「想い」の真ん中にはいつも、子どもたちがいる。

だからこそ、と思った。教委を含め、石巻市は大川小学校被災児遺族に対し、誠意を持って向き合い、徹底的に真相を究明していただきたい。遺族の悲しみを、このまま封じ込めることがあってほしくはない。

高田とは、近いうちにまた会うことを約束して別れた。高田と友であることを、私は誇りに思う。

この稿が、大川小被災問題の解決のきっかけの一助になることを、ただひたすらに願う。

PROFILE

佐久間秀人（さくま・ひでと）

1986年獨協医科大学卒業。同大学第3内科に在籍、血液疾患を中心として診療、研究に従事。1996年より佐久間内科小児科医院勤務。2009年より院長。

医学博士、日本内科学会認定内科医、日本小児科医学会子どもの心相談医、日本医師会認定産業医、日本禁煙学会認定禁煙支援医、あだち地方地域自立支援協議会会長。

次号は遠藤剛氏・えんどうクリニック（福島）です。